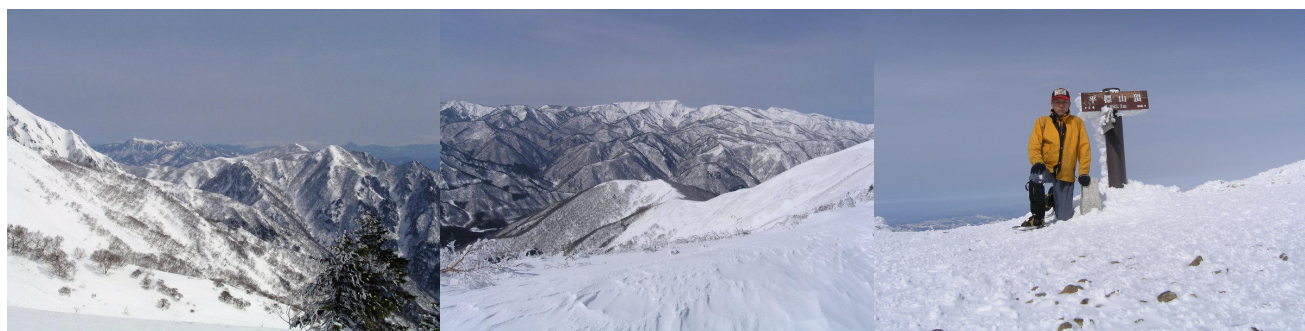


平 標 山 山 山 行 記 録



谷川岳への縦走路

松手山と苗場山

山を一人占め

目的地	平標山	期 日	平成21年3月5日(木)・終日快晴
山人	笠原正雄単独	特 記	他に入山者は無く、駐車場を出てから戻るまで誰とも会わなかった。

地点名	時刻	記 事
与板発	午前 5:40	小千谷 IC~湯沢 IC。湯沢道路情報センターで弁当朝食。
三 国 小 学 校 脇	8:00 発	他に駐車は無い。町営 P はまだ雪の下。一番奥の別荘まで除雪されていた。凍みたアスファルトに薄く雪が降っていた。林道の約 1m の雪に上り、壺足踏み跡に従う。ヤカイ沢入口にスキートレースが 1 本あったが、直進の踏み跡を追う。
送 電 線 下	8:40	そろそろ尾根に向かって良いのではないかと思うが、立派な踏み跡のため先へと進む。送電線下で地図を開き、現在地を確認する。
カンジキ歩行へ	9:15	林道が蛇行している所でカンジキを履く。間も無く道を離れて林間へ入る。
踏み跡が途切れる	9:35	壺足からスノーシューに変わった踏み跡が Uターンしている。騙された様な気分である。標高点 1766 迄 GPS1.35 km地点である。
標高 1430m 地点	10:05	広い雪原登り、GPS を確認しながら登高して行く。結構なアルパイトである。
アイゼン登高へ	10:25	10 数 cm の新雪の下にクラスト面がある。傾斜がまして、アルミワカンの爪が刺さらなくなって来た。アイゼンを履くが、時々足元の雪がダンゴになる。
広い尾根になる	11:10	これ迄も広い尾根だったが更に広がる。5 分程前に右の沢越しに山の家が見えた。
夏道尾根に上がる	11:20	山の家から 200m 程山頂寄り。仙ノ倉山が大きい。万太郎山からの先に谷川岳の双耳峰が見える。10 分後アイゼンからワカンに履き替える。以後、最後までワカン。
標高 1880m 地点	12:00	ヤカイ沢方向を覗き込んで見る。急斜面である。スキーだとしても上級者コースになるであろう。左下方の尾根を使えば、歩きで登下降出来そうだ。僅かだが、そちらに向かうスキートレースもつけられていた。
平 標 山 頂	12:20	良く晴れて全部見渡せる。万太郎山、茂倉岳と見えているはずだが、山々また山の連なりで同定出来ない。しかしはるか遠方に飯豊が見えている。少し風はあるものの穏やかだ。ヤッケを羽織る。ストーブでおでんを温めてランチ。
下 山	午後 1:25	平標新道を右に見て松手山へ向かう。しばらくして毛糸手袋から皮手袋に替える。一度雪の割れ目に膝上まで抜かった。一部夏道ロープが露出していた。
H 1 6 7 7	2:10	この手前の木製階段の下りは、一部雪が剥げていて少してこずる。
ヤ ッ ケ 脱 ぐ	2:15	下りを殆んど終え、暖かくなって来た。皮手袋から毛糸手袋に替え、再び日焼け止めを塗る。雪庇の張り出した尾根を進む。
松手尾根に入る	2:30	林間歩きとなり、ボンヤリと下って行ったところ、チョット様子が違う。松手山ピークを右トラバースして松手尾根に乗ってしまった。このまま下って二居に下りる手もあるが、駐車地点に戻るには R17 を 3.5 km 歩かなければならない。左手を見て巨大鉄塔を見つける。林間急傾斜地を横切り予定ルートに戻る。後で GPS 軌跡を調べたら 200m 程下ったようだ。
巨 大 鉄 塔 下	2:45	コンクリート台座に腰を降ろす。いつもここは風が強いが、今日は穏やかだ。
別 荘 地 道 路	3:15	藪っぽい中を進み、一部夏道が分かった。けれども最後の最後で左方向に進路を取りきれず、またもや一昨年と同じ別荘の裏手に下りてしまった。
駐 車 地 点 に 戻 る	3:30	夏道の登り口は、1 m 超の除雪壁となっていて、トレースも無い。二居の「宿場の湯」は休業日、三侯の「街道の湯」で入浴。6 時頃帰宅。

一昨年 3.21 と 3.31 にこの山を目指した。初回、天候条件は万全だったのだが、一人ラッセルに疲れて気力を失ってしまい松手山までだった。次は H1677 迄進んだのだが、強風に危険を感じ戻って来た。以来、残雪山の宿題となっていた。今回、直前迄は松手山経由の上山と思っていたが、確実に頂を踏みたいと思い、山スキーで人気のヤカイ沢側から上ることに変えた。予め地形図で上れそうな尾根を調べておいたのだが、2 本だけスキートレースがあったものの、立派な歩行トレースに従った。まさか途切れているとは予想もしなかった。結果的に平元新道への夏道に沿って上ったことになったが、標高 1500m 辺りで夏道上から北方向に進路を切って、稜線に上がっている。結構な急登であった。むしろ、ヤカイ沢合から送電線鉄塔と H1432 を進む尾根の方が良かったのではないかと思う。もし、そこを上るとしたならば、今回、トレースは無かったであろう。快晴に恵まれ、絶景に出会い、宿題を果たせた充実かつ満足の山行であった。